

## 7) 高山紀斎家について—池田家所蔵の古文書から—

Documents on the “Kisai Takayama Family” —from the Ikeda Family Collection—

岡山県歯科医師会 横山 好文

Yoshifumi Yokoyama, Okayama Dental Association

奥村鶴吉著「高山紀斎先生小傳」(明治44年発行)によると、「先生は嘉永三年十二月十二日、備前国岡山に生る。父は紀次氏、母は清子、先生は其長子なり。幼名を弥太郎と云ふ。」とあり、高山紀斎先生の父親は、紀次となっている。紀斎に関する他の資料も父親は高山紀次となっている。

明治の初期、廃藩置県を前にして、全国的にすべての武士は藩政改革にしたがい部門を返上し、士族に名をかえている。岡山池田藩はその際、各藩士にたいし、最後の当主より、家系と一族の動静を申告させている。これが「先祖併御奉公之品書上」と云い、現在膨大な池田家資料として、岡山大学図書館に保存されている。まことに貴重な資料である。

岡山大学付属図書館が1982年に編集した「特殊文庫開設」によれば、記録の大部分は藩庁の各部局における藩政上の記録であり、各部局の日記・留帳、藩士の奉公書、侍帳、切米帳、諸職交代、検地関係の記録、切支丹関係の記録、藩校関係の記録など多種多様にわたっている。とくに重要な史料を列記すると、藩の法令を集録した「法令集」は目録・首巻とも15冊よりなり、寛永19年(1642)から文政7年(1824)にわたり法令または物事の規格となるべき記録・雑記の中から抜粋、類編したものである。

また「市政提要」35巻24冊、(巻1欠)は寛文年間から万延(1661～1860)にわたる岡山城下関係の貴重な史料集である。「社寺明記」も利用価値が高いとされている。

明治初期の廃藩置県時における藩士の動向を知るものとして次の史料があげられる。

「特殊文庫解説」によれば「撮要集」40巻39冊は幕政初期(1600年代)から文政6年(1823)の間の藩政全般にわたる史料で、とくに地方関係諸般の類案史料集というべきものでこれには後編9

巻(文政7～明治元年)がある。

次に3000冊におよぶ「奉公書」は藩士がそれぞれ先祖以来の奉公の由来よりはじめて、代々の跡目相続のこと、役職のこと、また臨時の役目と其の役目の内容、その他屋敷を賜ったことなどを詳細に年月日をいれて編纂されている。元禄9年(1696)が最も古く、跡目相続するに従って書き継ぎ、最も新しいものは明治3年(1870)のものである。

次いで「侍帳」(士帳)148冊は藩士の石高を記した名簿で老中・番頭・近習物頭・組頭、あるいは所属の組などに分類され記載されている。古いものは慶長17・18年(1612・13)新しいものは明治2年(1869)のものである。

「切米帳」74冊は主として士族以下の下級藩士の切米高を記録した名簿であり、延宝元年(1673)から新しいもので明治3年(1870)までのものがある。

とくに「諸職交代」7部12冊は岡山藩の職制を知り得る中心史料で最も古いものは安永6年(1777)、新しいものは明治3年(1870)のものである。これらの資料から明治初期の高山家の記録を抜きだしたものである。

幕末の池田藩陪臣に高山姓は四家ある。すなわち、高山厳夫、高山専太、高山寅三郎、高山惣吉である。高山惣吉については、元陪臣、旧主：家老に日置とあり書上六代とある。惣吉自信は惣右衛門紀清を明治二年に改名して惣吉にしている。明治二己巳年十二月晦日、御奉公之品書上、高山惣吉とあり、先祖書からはじまっている。「一、初代高山惣右衛門頼置義、生国播州赤穂之者二而御座候、元禄二巳年二月朔日、日置猪右衛門忠明江罷出云々…」とある。中略。「一、十一月八日倅彌太郎義英学教授補被仰付候、同月十五日倅彌太郎義岡田攝蔵江随従遊学被、仰付同月十七日東京表江出立仕候、已上、明治三庚午年十二月二十九日高山惣吉印鑑、紀清 花押大村定平殿、喜多島勝策殿」(原文のまま)。

これを見ても明らかなように、紀斎(彌太郎)の父は紀清であり、印鑑、花押まで確認できる。

岡山大学付属図書館では池田家文庫藩政資料のマイクロ版を集成し、その藩士第1部に前述の「奉公書」を収め、第2部に「分限帳、知行、除帳、格式、相続、賞罰、規式、屋敷および雑」として

収めているのでさらに多くの研究者に資するものと考えられる。

また、1996年より附属図書館において絵図類データベース作製がはじめられ、全国に情報発信し、インターネットに載せることも計画されている。

(この文章は発表者が急逝したため、岡山大学図書館の了解を得て学会開催担当者が補完したものである。)

## 8) 小島原泰民著歯科小技について

“SHIKA SYOUGI” Written by Yasutami Kojimabara

日本大学松戸歯学部 ○山口 秀紀  
村木 春長  
渋谷 幸男  
谷津 三雄

Hidegori Yamaguchi, Harunaga Muraki,  
Yukio Shibutani and Mitsuo Yatsu, Nihon  
University School of Dentistry at Matsudo

演者らは第23回(平成7年度)本学会総会において小島原泰民と歯科病理書について報告した。日本歯科医師会編、歯科医事衛生史前巻(昭和15年10月30日発行)の歯科図書の項の第10番目に歯科小技、小島原泰民、明治23年2月刊、ハリス及びガレットの歯科手術書の訳と簡単にされている。小島原泰民は東京歯科専門医学校(明治21年3月創立)、歯科矯和会(同年8月創立)(同年9月に歯科講義会、更に私立大日本歯科講義会と改称)および長交会(明治31年初夏創立)などで講師として勤務。その間、欧米の医学書、歯科医学書を読破し、歯科小技(明治23年2月刊)から歯科解剖学図譜(明治35年)まで14種類以上の多数の著(訳)書があり、これら著書がわが国の黎明期における歯科界に及ぼした影響ははかりしれないものがある。今回は小島原の処女出版である歯科小技について解題を試みた。

本書は14×20.5 cm大、洋本、全254ページ、明治23年2月出版、発行人小島原泰民、印刷所東京築地活版製造所、発行書肆、島村利助、丸善書店、金1円50銭、凡例に「一日歯科醫某君余カ僑所ヲ訪フ談偶々醫事ニ涉リテ曰ク歐州文明ノ祥雲

一タヒ東洋ニ鬩クヤ文物制度悉ク一新シ、就中醫學ノ如キハ最モ駿速ノ進歩ヲ為シテ診療ノ術大ニ改リ解剖、生理、病理、藥劑、内外科書等ノ著譯ハ汗牛充棟ナラサルノ盛大ヲ致セリ、之レニ随ツテ齒科モ亦タ漸ク頭角ヲ露ハシ近來ニ至リテ各處ニ齒科専門學校ノ聳立セルヲ見ルハ眞ニ賀ス可キノ秋ト謂フ可シ、蓋シ後進ノ士ヲ誘掖セント欲セハ完全ノ教科書ヲ編述スルニ如カズト雖モ齒科に關スル著書ハ僅々ノ少数ニシテ殊ニ手術ニ關スル書ノ幾ント絶無ナルヲ遺憾ナリトセリト…本書ハ余カ齒科講義會ノ講本ニ供センカ為メ現時世ニ行ハルルハリス氏並ヒニバーレット氏ノ齒科手術書ニ就キテ大略ヲ纂譯セルモノナリ……文意ノ明白ナラザル所毎章之レアルヲ認メシカ故ニ敢テ世ニ公ニスルコトヲ好マストノ一言ヲ以テセリ君良ヤ少ラク繙閱セル後突然口ヲ發キテ曰ク善キ哉是ハ齒科醫ノ技術上一日モ欠ク可カラサル所ノ急務ノ書タリ子ヤ何為レゾ速カニ世ニ公ニセサルカ文字ノ優麗ナラサルハ深ク尤ムル所ニ非ラズ…齒科ニ於ケル今日ノ急務ヲ補フノ一助トナルニ至レバ……君ノ言ヲ諾シ遂ニ活字ニ附スルコトヲ為セリ若シ果シテ君ノ云ヘルカ如ク此書ニシテ世ヲ益スルノ微價アリトセハ余ノ幸福之レニ過キサルナリ」から本書は、歯科講義会のテキストとして出版されたものであることを知ることができる。しかし「歯科醫某君」とは誰であるかを知ることができない。

目次から内容を見ると第一章は第一齒牙發生期は1~7ページで「暫齒ノ發生」で乳齒の發生と解剖、第二章は第二齒牙發生期7~10ページで「久齒發生ノ順」など永久齒の發生と解剖、第三章は久齒發育ノ異常10~13ページで梅毒齒を含む口腔病理、第四章は久齒位置ノ不正14~30ページで齒科矯正、第五章齒牙ノ朽傷31~72ページで齒根膜を主とした齒周疾患、第六章は齒痛73~79ページ、第七章齒牙ノ器械的損傷80~83ページで齒牙の磨耗と外傷、第八章齒牙並ヒニ其遺株ノ拔除84~108ページで拔牙術、第九章は迷朦藥嗅入並ニ其他ノ小技術108~123ページで全身麻酔と義齒、齒石など。なお、この項の全身麻酔藥については演者らの一人谷津が齒学史資料図鑑に詳述してある。第十章造腔術123~135ページで空洞防濕法を含む齒内療法、第十一章充填料136~161ページで保存療法、第十二章は金充填料送入法並